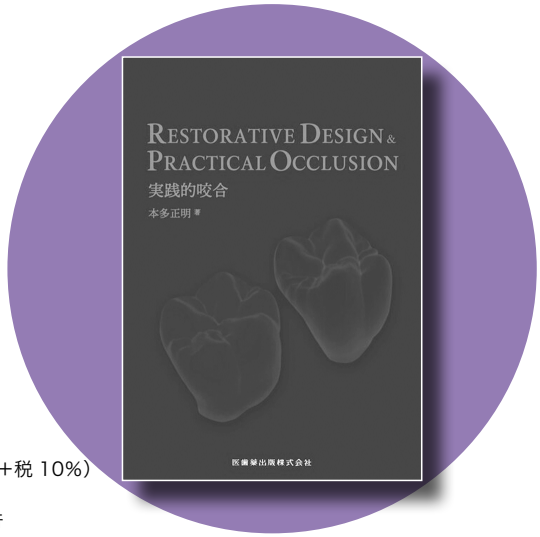
Book Review

RESTORATIVE DESIGN & PRACTICAL OCCLUSION 実践的咬合



本多正明　著

A4 判，296 頁
カラー
定価 30,800 円
（本体 28,000 円＋税 10%）
医歯薬出版刊
2023 年 9 月発行

Reviewer
小出　馨　Kaoru Koide
（日本歯科大学名誉教授）

本書は，歯科治療を行ううえで不可欠な咬合の理論と実践の重要事項を明解に示した「臨床咬合実践学」のバイブルである．前書の「補綴設計＆設計集」に続く第二弾として上梓されたもので，生物力学的咬合理論に基づく実際の咬合構成基準を，筆者である本多正明先生の 50 年以上にわたる臨床成績により要点を押さえて見事に編集されている．歯科臨床では，残存諸組織保全と機能快復率向上の両立による「Longevity（長期安定）」の達成が，患者の人生に貢献できる究極の目標である．これを目指す歯科医療者には，前書と合わせて座右の書にされることをお薦めする．

本書は，7 つの CHAPTER により順序立てて構成されており，全編を通して主に治療後 20 年～40 年を越える正しく「Longevity」の症例が満載されている．そこからは，筆者の卓越した診断と治療能力の高さ，きめ細やかなメインテナンスの的確性が顕著に読みとれる．いずれも，その洞察力の深さには感服せざるをえない．

CHAPTER 1 の実践的咬合論では，補綴治療において特に「力のコントロール」が咬合と密接に関連し，「咬頭嵌合位の安定」と「咬合干渉の回避」が重要となる．また，筆者による「咬合の分類と目標」のフローチャートは，さまざまな症例の長期経過とともに資料が提示されており，読者にとって臨床の強力な指標となる．

CHAPTER 2 と 3 では，咬合安定を静的咬合安定と動的咬合安定に分けて明解に示しており，顎関節における「生理的顆頭位」を的確に求めるには，「筋スパズム」と「エングラム」の診断，そしてその対応が的確に行えなければならないと言及している．臼歯部の咬合接触は，左右的に 3 点接触による「ABBC コンタクト」を推奨している．私自身は，およそ 20 年前に ABBC を歯種別に，より有効な 3 次元的位置への変更を本多先生から教えていただき，以来臨床で実践してきた．

また，側方偏心位での犬歯誘導には，下顎の側方限界運動路上で M 型側方ガイドを構成して，顎関節の生理的機能と調和させることを原則にしている．ブリッジの支台歯設定にも，筆者は独自に支持組織の支持能力を詳細に再評価するとともに，歯種ごとの顎関節と咀嚼筋との位置関係から，負荷の加わる様相も検討事項に加えて，より適正なブリッジの設計基準を提案している．これらは，治療計画立案時のきわめて有効な指標となる．

CHAPTER 4 の咬合診断では，筋と顎関節の触診による臨床診断の重要性，ならびに咬合平面の位置と前後的傾斜度，各種咬合湾曲の設定基準とその効果を明解に示している．

CHAPTER 5 の矯正治療とのインターディシプリナリーアプローチでは，矯正医が補綴治療のゴールイメージを共有してくれることが大原則であり，その円滑な連携の取り方についても症例を通して解説している．

CHAPTER 6 の補綴装置に与える咬合面形態では，三角隆線の形態と高さや走行方向を，ディスクルージョン量の最小となる下顎の側方限界運動路に調和させてファンクショナルルームを確保し，「力のコントロール」を図る．上顎前歯部の舌面形態にも，同様の目的でインターコロナルファンクショナルルームを設けることを推奨している．

CHAPTER 7 のメインテナンスと Longevity から見た配慮事項では，清掃性を考慮した歯の軸面形態がインプラント補綴においても重要なことを，チェック項目ごとに解説している．

また，AUTHOR'S VIEW（筆者の見解）はトピックとして 9 項目示されており，特に中心位の最新の定義 GPT-9 に至るまでの変遷を，年代ごとにわかりやすく解説しており，興味深い．

本書は，50 年以上にわたり歯科臨床に情熱を注ぎ続け，純粋な誠意とどこまでも謙虚な姿勢を貫き通してこられた本多正明先生が，後に続く後輩への熱い思いを込めた贈り物であり，他に類を見ない宝である．長年ご指導賜ってきた後輩の一人として，心からの敬意と感謝の意を表させていただきたい．